乳飲み子を背負い十四歳を頭に五人の子供達を紐で連ねての上陸、人の渦の中、どの列車に乗るべきか、漸く函館行の列車を見つけたときは満員、通路に座って二十数時間、敗戦による逃避行の意味も理解せずに子供達は、着替も持たずにリュックの中から教科書や絵本を出して見ている有様。

これからどうなるのかと一睡もできず案じているうちに函館へ。乗り換えで渡島福島の二十数年振りに会う叔父の家へ。招かざる突然の貧客、食糧難、インフレ、鉄道局のつてを頼って札幌へ、そして現住地の芦別へと九か月の間に三か所を転々と歩き、夫の不在をなげき、あるときは人の情を喜び、あるときは無情をのろい、持ったことのないスコップで石炭下しをさせられ、買い出しに出かけ、八畳一間に七人暮らし、全く悪夢のような三年間でした。

でも、六人の子供達は栄養不良ながらも元気な姿で夫に見せられたことは無上の幸だったと思っています。

引揚げ後家族のために苦労してくれた夫の十七回忌も過ぎ、夫の残してくれた年金に感謝し、今は定年を迎えた長男夫婦とともに、一人も欠けていない子供達や孫や曾孫の便りを待ちながら趣味の手芸で楽しく過ごさせて戴いております。二度と再び、誰れにもあの苦労はさせたくないと思っています。

引揚げ・開拓に入植、荒地に悩む十年

北海道　佐々木　末太郎

海外移住の動機と家族の状況

私の父が明治三十九年から樺太西海岸鵜城村に毎年漁夫十人ぐらいを連れて春五月初め渡樺し（鵜城村に）海が荒れて漁が出来なくなる九月中旬切揚げて郷里亀田郡銭亀沢村（函館市と三里位離れている）に帰って来ます。

毎年その繰返しです。私も父に連れられて渡樺していたのですがだんだん漁も不況になり帰郷することが出来ず大正三年五月頃から樺太に永住するようになり、その後漁業から農業に転向し父が死亡（昭和六年没）

終戦直前、直後の生活の激変

忘れもしない昭和二十年八月十日午後二時頃在郷軍人鵜城分会員五十人くらいが市街の前浜で手榴弾の投てき練習を夢中でしているところへソ連の偵察機が現れその様子をカメラに収め飛び去ったのです。それが終戦後判ったのですが鵜城村に軍隊が大勢駐屯しているということで敵の目標になり八月十三日正午頃飛行機の爆音がするので警防団本部の窓からその方向を見上げると敵の飛行機が二機現れすぐ機銃掃射が始まり市街の方々に焼夷弾をバラマキ飛び去ったのです。幸い死傷者はありませんでした。

それから敵の攻撃は日にまし激しさを加え夜間は潜水艦による艦砲射撃、焼夷弾攻撃等々しかし在郷軍人分会には小銃が十丁くらいよりなくまったく無防備の状態でした。市街地の住民は戦火を恐れて山奥に避難する者また南下（久春内、泊居方面）して難を避ける者、自動車がないので病人とか歩けない老人はリヤカーに乗せて山坂の多い道を苦労に苦労を重ねて避難したのです。

途中力尽き歩けない老人を木の根本に枯葉を集めてその上に寝かして涙ながらに立ち去った人も大勢あったそうです。

八月十五日朝方突如ソ連海兵団が鵜城市街の南端にある船着場目がけて機関銃を掃射しながら上陸開始その数約五千人くらいそのとき殆どの住民が安全な場所に避難していたので死傷者はありませんでした。

私も総勢家族九人を安全なか所と思い市街地から三キロほど離れた農家に避難していたのですが、弾丸がそこの玄関までビュービューと音を立て飛んでくるので危険を感じ更に山奥に避難したのです。当時二歳半になる赤ん坊がいたのですが、樺太は八月中旬になると朝晩の冷え込みがひどく夜は着物だけでは寒いので子供を妻との間にはさんで暖をとり、寒さを少しでも防ごうと思ったのですが寒い寒いと泣くのです。焚火は煙が敵の目標になるので炭火で炊事のしたくです。飲料水は川水を使用したのです。

敵が上陸した日（八月十五日）夕方ソ連司令官の命令で避難先から出て来て現地に復帰しそれぞれの生業につけ従わないものは直ちに銃殺するとの厳重な達しなので

我々が出て来たら市街地の入り口でソ連兵二十人くらい自動小銃を手に持っていて身体検査が始まり、その際時計、指輪、宝石類など全部提出させられたのです。

そして検査を終え十六歳以上の男子は（病人と六十歳以上の男子は除く）そのまま自宅に帰らず鵜城小学校舎に強制収容されたのです。

強制収容されてから五日目十六歳以上六十歳までの男子（病人は除く）は其のまま船入澗に連行され発動機船に乗せられ八里北に離れた恵須取町の女学校に収容されたのです。

私共は五十人一組とされ教室に其のまま収容されて仕舞った。食事はニギリ飯が一個とミソ汁お椀で六分目くらい、これだけではとても十分ではありません、文句を言うとすぐ銃殺です。夜は板敷の床に着たままゴロ寝です。

作業は種々な荷物の積みおろしから、重油の詰め替え、死体の処理等さまざまでした。

作業所に行くときは四列に並べ十メートル置きぐらいにソ連兵が自動小銃を突き付け吾々を威嚇し逃げる素振りでもしようならすぐ銃殺です。

収容されている間残して来た家族の安否が心配で夜もグッスリ寝ることが出来ません。

家族も連行された吾々の行先が判らずもう処刑されたのではと心配していたそうです。

収容されてから二十一日目解放の許可があり急いで自宅に帰ったのです。

ソ連の行政は稼げる者は登録し、何かの職業に従事しなければならないので私は漁夫に、妻と子供（十六歳以上）は農作業に従事したのですが、私の漁夫は大変でした。小さな帆船で毎朝二時半沖へ出て行き晩我々が家に帰って寝るのが九時過ぎです。樺太の海は荒いので風波の日が多く本当に苦労の毎日でした。

冬になると造材仕事です。零下二十度の樺太の冬です。手足が凍るような寒さブルブル震えて仕事も手に付かない始末です。

昭和二十二年七月日本への引揚命令が出て二〇三（ニイマルサン）高地といわれている断崖絶壁の道路を通り恵須取から引揚者の集合場所真岡へ行く石炭の積取船に

乗せられ貨物扱いです。

船が恵須取を出てからだんだん天候が悪くなり風雨も激しくその上波のシブキが我々の頭からかかってくる。ようやく真岡に下船、身体検査や消毒が済んで高台にある真岡女学校に収容され約一か月船待ちの後、日の丸のひるがえる日本からの引揚船高倉山丸に乗船八月二十一日なつかしの日本の土を踏んだのです。

樺太引揚後の記録

昭和二十二年八月三十一日函館港に上陸、函館千代ヶ岱元兵舎に収容させられ九月一日無縁故者として紋別郡下湧別村に移送されそこの青年会館に落ち着きました。上陸のとき渡された一人千円計九千円これが唯一の私共の財源です。

何せ家族九人の生活がかかっているので早く働く積もりでもなかなか適当な仕事がないまま一か月が過ぎました。丁度下湧別字床丹という部落で澱粉工場と農業を経営している人から私のところで働いてみないか食べることだけは保障するからと言うので働くことに決まり来たのですが、住宅は僅か十二坪（乾燥場を改造したもの）で九人の家族が寝るのがやっとです。当時はトウキビ粉が主食で、米はホンの少しの配給、澱粉の黒い二番粉を薪ストーブの上で焼いて食べ、また南瓜、馬鈴薯もよく食べました。二十四年三月引揚者を対照にした開拓地の払下げがあり私も約八町歩の荒地の払下げを優先的に受けて入植、開拓に専念したのですが重粘土に石コロが多くそれに高低が激しく畑として利用できるのは僅か二町歩くらい、それでも暗渠を掘ったり、石コロを取り除いたり苦労をしたのですが実績があがらず、牛を入れて酪農に取り組んでみたが駄目でした。

いくら頑張っても借金がふえる一方冬は造材の仕事に従事どうやら生活を支えたのですが、とうとう十年目に見切りを付けて現在地（斜里町大栄）に土地を求め昭和三十四年移住したのですが、この土地は平たんですが荒地でそれに泥炭地でゴロゴロした土のかたまりで作付等到底出来る状態ではありません。この泥炭地を八分通りの作物の収穫出来るまでにするのに七年の歳月が流れました。

朝は四時頃から夕食後月明かりなどを利用し十時頃ま

で頑張りました。（畑の中に埋まっている木の抜根作業です）本当に苦労の連続でした。住宅は十二坪くらいのバラックの建物で、吹雪の夜等窓戸のスキ間から雪が入り顔にかかって寝付かれない夜も何日かありました。

井戸があったのですが掘り方が浅いため酸性が強く飲めないので隣の家まで（約百メートル）水をもらいに行くのです。これも一か月くらい続きました。大変な苦労でした。井戸を深く掘ると良い水が出るのですがお金がないのでそれも出来ません。もちろん風呂場等はありません露天風呂です。鍊釜の小さなのを風呂釜に使い酸性の強い赤い水を使用入浴するのです。

冬はとても寒く風呂から出るとブルブルからだが震えてすぐ風呂から出ることが出来ないのです。

整地した泥炭地に作付してもまだ十分土地改良が出来ていないので、お金になるような作物の収穫がなく生活が苦しいので毎年十一月初めから翌年四月末頃まで造材作業に子供等三人出稼ぎです。そんなことを繰り返しながら斜里町へ移住してから十年の歳月が流れ、その間の苦労はとても私の拙い筆では表現出来ません。

斜里町に移住して十年後の四十四年頃から土地の改良も徐々に出来、お金になる作物が収穫出来るようになり、現在なんとか安定した経営をすることが出来るようになりホットしているところです。

農協や部落の方々の信用も得て今孫がこれを引継ぎより良い模範農場にするため日夜頑張っております。

次代の平和な礎となった人生に満足

北海道　伊藤清治

居住動機と家族の状況

樺太に生まれ樺太に育ち父の経営する雑貨店が当時繁昌していて自分の発育盛りは何ら不自由のない生活振りでした。しかし昭和十二年頃から次第に戦争が激しくなり召集をされて行く若者が多くなって、世相は軍国色となって行くありさまでした。こんな時代の自分等のような若者は戦争はそれほど嫌ってはいなかったと思います。かえって参戦し、国のためにつくしたいという愛国